

# 保育者の専門性向上につながる学びに関する一考察

－ 養成校への進路選択の実態に着目して －

浅井 拓久也・浅井 かおり

A Study on the Learning for the Development of Teachers' Specialty

－ Focusing on the Cases of High School Students' Career Path to Training School －

Takuya Asai and Kaori Asai

## 要旨

本稿では、養成校での専門的な学びと高校での学びの関係を検討し、高校での学習を通じた学習力や基本的な知識の習得の必要性を指摘した。現代的な課題に対応するため保育士の役割は複雑で多様化し、専門性を向上し続けることが求められている。一方で、養成校の学生の学力に問題があることは数多くの先行研究が示してきた。そこで、本研究では養成校進学希望者の学習に対する意識に着目して、高校の学習科目との関係からどのような学生が養成校を希望するか、また高校での学びが養成校の学びとどのようにつながるかの2つの小問に取り組んだ。分析結果として、養成校への進学には技能教科が有意な影響を与えており、一方で主要教科や情報科目は有意な影響を及ぼしていなかった。養成校への進学希望者は将来の仕事である保育に主要教科の学習は必要ないと考えていること、また多くの養成校の入学試験でも主要教科が課されないことから高校で主要教科を学習する必要性を感じていないことが明らかとなった。しかし、高校での学習を通じて身につける学習力や基本的な知識が養成校入学後の専門的な学習に重要であることから、養成校は進学希望者に対して高校での学習の重要性を強調することが求められることを指摘した。

## キーワード

養成校での専門的な学び、高校での学習、学習力、多項ロジスティック回帰分析

## 1 研究背景と課題設定

現代社会では、知識や技術の進化、高度化が顕著である。そのため、個人においても過去において学んだ知識体系や技術だけでは十分ではなく、それを発展、改善していく学びの継続や維持が求められている。

社会のなかで存立する機関である保育所もこうした流れとは無縁ではない。平成30年度施行保育所保育指針改定の議論においても、「子どもや子育てを取り巻く環境が変化する中で、様々な困難を抱えた家庭・子どもへの対応にあたり、それぞれの背景のアセスメント、関係職種や機関との連携を行うなど、保育所に求められる支援機能は多様化・複雑

化している。こうしたことに伴って、保育士には、より幅広く、高度な専門性が求められるようになってきている」と保育士の専門性の高度化が指摘されている。加えて、「専門職である保育士は、資格取得後も、日々の保育士としての業務等を通じ、その専門性を向上させていくことが重要である」（厚生労働省、2017、p.10）と養成校卒業後あるいは保育士資格取得後も専門的な知識や技術の不断の向上について指摘されている。

保育士の専門性の基盤をつくるうえで養成校の役割は重要である。現在進められている保育士養成課程の見直しや保育士のキャリアパスに関する研修の議論では、保育士の専門性の高度化や学びの継続の流れをうけて、養成校でどのような知識や技術を学生に伝えるかが検討されている。養成校での学習を通じて、現代社会における専門職としての保育士の基盤をつくること目指されているのである。

しかし、専門職である保育士を養成するという目標と実際の養成校における学生の現状の差は大きい。たとえば、佐藤（2015）は養成校の学生が作成した実習日誌を分析し、主語と述語の対応や助詞の使用法が不適切であること、話し言葉のまま書かれていることを抽出している。また、浅木（2011）は養成校の学生の理科離れを指摘している。学校教育で学ぶ理科の知識は、保育では5領域における環境や表現と関係するが、将来の保育士である学生が理科の基本的な知識を習得していないため、子どもが科学や自然に関心をもつような環境や素材を十分に用意できないのではないかと懸念を示している。

これらの先行研究が示すことは、専門的な学びの前提や土台となる基本的な学力が十分ではないということである。基本的な学力とは、読み書きの力だけでなく、小学校から高等学校までの学校教育で取得することが想定されている知識のことである。佐藤（2012、p.80）が「短大に入学して保育者になるための勉強を始めてからも、専門職を目指しているという目的意識とそのためへの向上心を起こさない」と言うように、基本的な学力が不十分であると養成校入学後の学習が難しくなり、専門的な学びに

つながらないのである。

そこで、本論文では養成校への進学を希望する高校生に着目する。入学後の専門的な学びを充実させるためには入学前の学習が重要である一方で、実際には十分な学習がなされていない状態で入学する学生が多いことからすれば、養成校への進学を希望する高校生が高校での学びをどのように理解しているか、高校での学びと保育士という職業との関係をどのように考えているかを把握することは、保育士養成のありかたを考えるうえで重要である。また、これまでの先行研究では養成校進学に関して保育士志望の理由との関係から分析したものが多かったが、高校での学習に対する考え方との関係から分析したものはなかった。

以上から、本論文では養成校での専門的な学びと高校での学びの関係を検討する。具体的には、高校の学習科目との関係からどのような学生が養成校を希望するのか、また高校での学びが養成校の学びとどのようにつながるのかの2つの小問に取り組む。

## 2 研究方法

小問1では、養成校進学希望者の特徴を明らかにするため、高校生の進路選択と試験の得点との関係を分析した。分析対象は、関東圏内の公立高校（男子学生103名、女子学生110名）に在籍する3年生である。本高校を選択した理由は、進学希望者と就職希望者が半分ずつおり、それぞれの選択も多様であることから、養成校進学希望者の特徴を相対的に明らかにすることができると判断したからである。また、養成校進学者の在籍する高等学校として平均的な学生集団であることから選択した。

本高校の3年生のうち、男子62名、女子60名から得られた進路希望および主要教科、技能教科、情報の試験得点を分析に用いた。進路希望では、3年次の4月に進路希望調査を実施し、その結果を養成校進学、養成校以外進学、就職の3つに分けた。主要教科では、国語と数学の試験得点の平均点（四捨五入）を使用した。試験は5月に実施された校内試験である。技能教科は、音楽か美術の試験（実技

試験)の得点を使用した。情報は、ワードやエクセルで指定の書類を作成するという試験の得点を使用した。

以上のデータを用いて、多項ロジスティック回帰分析を行った。従属変数の度数分布と構成比、独立変数の記述統計量は表の通りである(表1、表2)。なお、分析にはSAS 9.4を用いた。

表1 従属変数の度数分布と構成比 (N=122)

従属変数	N	%
就職	75	61.5
養成校	18	14.8
養成校以外	29	23.8

表2 独立変数の記述統計量 (N=122)

独立変数	Mean	S.D.	Min	Max
主要教科	46.8	19.99	17	92
技能教科	40.3	15.59	20	98
情報	46.8	19.52	12	89

また、定量分析に加えて、養成校進学希望者のうち5名の学生(男子2名、女子3名)を対象にして、高校での学びの意義や保育士の学びとの関係などについて半構造化面接を実施した。

倫理的配慮として、調査目的と内容、回答は学術的な目的以外に利用されないこと、分析後は質問紙やインタビュー記録を適切に破棄することなどについて同意を得たうえで分析を行った。

### 3 高校での学びの実態

本節では、養成校への進路選択と高校での学習内容との関係、つまり高校の学習内容との関係からどのような生徒が養成校への進学を希望するか、また養成校への進学希望者が高校での学びをどのようにとらえているかに関する分析結果を提示し考察を行う。

まず、進路選択を従属変数、高校の学習内容を主要教科(国語・数学)、技能教科(音楽・美術)、情報の3つにわけ独立変数として投入した多項ロジスティック回帰分析を実施した。表3はその結果を整理したものである。なお、独立変数間における共線

性に特に考慮すべき問題はなかった。

表3 高3生進路選択の多項ロジスティック回帰分析の結果

	養成校		養成校以外	
	Coef.	S.E.	Coef.	S.E.
主要教科	-.001	.023	.140 ***	.026
技能教科	.109 ***	.029	-.009	.030
情報	-.004	.017	.037 *	.019
定数	-6.146 ***	1.549	-10.233 ***	2.104
<i>-2LL</i>		177.696		
<i>Cox - Shell R<sup>2</sup></i>		.586		
<i>Nagelkerke R<sup>2</sup></i>		.696		
<i>McFaddenn R<sup>2</sup></i>		.477		

\**p* < .05, \*\*\**p* < .001 RG: 就職

養成校進学には技能教科が有意な影響を与えているが、主要教科や情報は影響を与えていなかった。一方、養成校以外への進学(四年制大学・短期大学・専門学校)には主要教科と情報が影響を与えていた。

また、養成校進学希望者に高校での学びの意義や養成校での学びとの関係についてインタビューを実施した。インタビューから、保育士の仕事と高校の学びは関係ないと考えていること、保育士の仕事に重要なことは実技であることの2つが抽出された。

前者については、保育士は子どもと遊ぶことが仕事だから微分やベクトルが必要な理由がわからない(男子生徒A)、日本史の年号や事件、数学の公式のような知識を覚えても仕事に生かせない(女子生徒A)、働くようになって必要ならそのときにネットで調べるから今できないことは問題ない(女子生徒B)、漢字が書けなくても職場ではパソコンで文章を書くので困らない(女子生徒C)のような意見があった。また、進学を希望する短大はAO入試だから勉強する必要がない(女子生徒B)という意見もあった。

後者に関しては、保育では製作や絵を描くことが重要なので美術の授業はまじめに受けている(男子生徒B)、ピアノが苦手だけど就職に必要なから音楽の授業をもっと増やしてほしい(女子生徒A)、オープンキャンパスで習った手遊びや製作が保育に

必要だと思う（女子生徒C）という意見があった。また、進学希望の短大は一般入試（科目試験）の代替として保育技術試験の結果を利用できるため保育士になるために必要なことはこうした技術と考えているという入試内容からの意見があった。

以上の多項ロジスティック回帰分析およびインタビュー調査の結果をまとめると3つに集約できる。まず、養成校進学希望者は国語や数学のような主要教科を学ぶ必要性を感じていないことである。ロジスティック回帰分析の結果から、養成校への進路選択に主要教科が有意な影響を与えていないことが明らかとなった。サンプル数が少ないことには留意すべきであるが、養成校という進路を選択する生徒は主要教科の学びを重視していないことがわかる。また、インタビュー調査から、数学や日本史の知識は自らの進路選択に関係ない、保育士の仕事に生かせないという認識が示されていた。また、就職後にデジタルデバイス等を活用することでいま学ばなくても就労後に学ばばよいという考えも示された。

養成校進学希望者は将来の保育士であるが、主要教科が重視されていないことは懸念すべきことである。浜野（2016, p.20）は養成校の学生を対象に行った調査結果をふまえて、国語や数学のような確かな学力について『確かな学力』は、養成校の学生が備えるべき必須項目であり、それを身につけてこそ園児に『（確かな学力の）芽生え』をはぐくむこと

ができるといえよう」と指摘している。また、吉田（2013, p.121）は保育士に必要な数学力の観点から「幼児期に経験すべき数学的活動はとて重要であると認識している。そのため、将来保育者となる学生は、幼児が適切な数学的活動ができるよう、『数学力』を身に付けることが必要」と指摘している。

先行研究は養成校の学生にとって主要教科の理解は必要であることを示しており同意できるものである。しかし、いつそれを学ぶかについては十分に指摘されていない。先に挙げた吉田は養成校のカリキュラムが過密であることを認めているが、養成校に進学してから国語や数学のような主要教科の学習をするのは（あるいは学習のやりなおしは）現実的には難しいであろう。また、何かを学ぶのに遅すぎることはないが、保育士として就労すると学生であったとき以上に時間的にも精神的にも厳しいことからすれば、保育士としての主要教科の重要性についてオープンキャンパスや高校訪問などの養成校進学前の段階で入学希望者に伝えることが必要であろう。

重要なことは、複雑な方程式の解法や日本史の細かい知識を習得するということではなく、数学の魅力や不思議、日本史で学ぶ知識と日常世界や地域社会との関係などを理解することの目的や意義を養成校進学希望者に理解できるようにすることである。保育所保育指針には、幼児期の終わりまでに育つことが想定される10の姿が提示され、社会生活との

表4 保育技術検定の試験内容

-	音楽・リズム表現技術		造形表現技術		言語表現技術		家庭看護技術		筆記試験	
	内容	方法・時間	内容	方法・時間	内容	方法・時間	内容	方法・時間	内容	方法・時間
1級	ピアノ演奏と童謡の弾きうたい	個別 5分	壁面構成	一斉 50分	素話の創作と実演	個別 3分	乳幼児の生活の世話（けがの手当）	個別 5分	各種 目有	各 10分
2級	ピアノ演奏と童謡歌唱	個別 5分	貼り絵（ちぎり絵・切り絵）	一斉 50分	絵本の読みきかせ	個別 3分	乳幼児の生活の世話（清拭、おむつの交換）	個別 5分	各種 目有	各 10分
3級	ピアノ演奏と歌唱	個別 5分	折り紙と描画	一斉 40分	紙芝居の実演	個別 3分	乳幼児の生活の世話（衣類の着脱）	個別 5分	無	—
4級	歌唱	個別 5分	折り紙	一斉 30分	童謡等短文の読みきかせ	個別 2分 程度	乳幼児の世話（だっこ・授乳・検温など）	個別 2分	無	—

出典：http://www.katei-ed.or.jp/shinko/table2.html（最終検索日 2017年8月10日）

関わり、数量や図形に対する関心や感覚が含まれている。保育者自身がこれらに対する関心や興味、基本的な知識をもつことで幼児がこうしたことに関心や興味をもつようになる豊かな保育実践が可能となるのである。

次に、養成校進学希望者は技能教科に関しては保育士の仕事と関係していると考えていることが明らかとなった。ロジスティック回帰分析の結果から、養成校進学に対して主要教科、技能教科、情報の独立変数のなかで技能教科のみ有意な影響を及ぼしていた。インタビュー調査からも手遊び、製作、ピアノに対する必要性が語られていた。

一般的に、保育士のイメージは手遊びや製作を通じて子どもと触れ合う、遊ぶというものであろう。養成校進学希望者である高校生も例外ではなく、保育士になるためにはピアノなどが必要であると認識しており、高校での技能教科の学習を重視していることがうかがえる。また、インタビュー調査のなかにあった保育技術検定の試験内容は表4の通りであるが、試験の特色・内容の紹介欄には将来の進路に役立つという言葉が添えられている。こうした試験内容からも保育士に必要な学びは主要教科ではなく技能教科に近いものであると考えるようになっていくと思われる。

これらの技術が保育士にとって重要であることは言うまでもない。保育実践では手遊びや製作、ピアノを用いた音楽表現が求められる。したがって、養成校入学前段階でこうしたスキルにつながる美術や音楽の授業に意欲的に取り組むことは意義がある。とりわけ、ピアノのようなすぐに習得できるものではない技術に関して養成校入学前にある程度習得できていることは、入学後の専門的な学びを円滑にするうえでも重要である。

最後に、養成校の入学試験の観点から主要教科への意識の低下がみられることである。インタビュー調査では、進学希望先はAO入試であり主要教科が課されないことや保育技術検定が入試の代替になることが語られていた。ロジスティック回帰分析の結果でも、主要教科は養成進学には有意な影響を及ぼ

していない一方で、養成校以外の進学希望者については有意な影響を及ぼしていた。

全国的にみれば多くの養成校が定員割れの状態であり、入学試験を行う実質的な意味が希薄化する大学入試の選抜機能の低下が顕著である。大学経営という観点から、学生確保のために無試験状態に近い（あるいは主要教科を試験科目として課さない）AO入試によって学生確保を目指す養成校も多くある。しかし、こうした状態は養成校を目指す生徒に誤ったメッセージを伝える危険がある。養成校を希望する生徒にとって主要教科は将来の仕事にあまり必要ではないという認識があり、かつ養成校の入学試験にも課されていないとすると、こうした認識をいっそう強化することにつながりかねないからである。

確かに、現代においては養成校に限らず定員数を満たしていない大学や短大はあるが、一般的には主要教科を課す大学や短大が多いためこうした大学や短大に進学する学生は主要教科を学ばざるを得ないであろう。ロジスティック回帰分析の結果からも、養成校以外への進学希望者には主要教科が有意な影響を及ぼしていたが、養成校と比べてそうではない進学の場合は入学試験に主要教科が課されることが多いという事情を表していると思われる。先にも指摘した通り、保育士の業務において主要教科から得る学びが必要ないということはあるが、養成校の入学試験において主要教科が課されないという状態が多くなるほど、高校では技能教科には集中するが、主要教科はそうではないという状態が強化されるのではないだろうか。

本節では、高校の学習内容との関係からどのような生徒が養成校への進学を希望するかについて分析結果を提示し考察を行ってきた。養成校進学希望者は、保育士になってからの仕事および入学試験内容から技能教科の必要性は認めている一方で、国語や数学のような主要教科の必要性に対する意識が低いことが明らかとなった。しかし、保育士として保育実践を豊かにするためには、主要教科での学びが必要ではないだろうか。次節では、この点についてさ

らに検討を行う。

#### 4 高校の学びと養成校の学びのつながり

本節では、高校での主要教科の学びと養成校での専門的な学びがどのようにつながるかについて検討する。

インタビュー調査から、養成校希望者は保育士の仕事に主要教科の学習内容が有益ではないと考えていることがわかる。確かに、保育士として就労するなかで微積分を用いた計算をしたり世界史の細かい知識を活用したりする場面は多くない。しかし、保育をするうえで直接活用しない知識であっても、こうした知識の獲得過程で習得する学びの方法、すなわち高校での学びを通じて身につける学習方法は養成校で専門的知識や技能を学ぶさいも活用できるものである。

また、高等教育機関では一般教養と専門科目を学ぶことになるが、一般教養科目があることから明らかに、高校までの学習で学ぶ基本的な事項や知識は保育士としての専門性を高める基盤として重要である。

前者の高校での学びを通じて学習の方法を獲得するという点では、天野（2004）は学習力の問題として指摘している。学習力とは、大学の専門教育に必要な学習のためのスキル、方法である。学習力が身につけていないことが昨今の大学教育の質低下、学生の学力低下につながっていることを問題提起している。

学習力の観点から高校の学びと養成校の学びの関係を考えることは重要である。後藤は(2011,p.26)は、保育士としての成長（熟達化）とは単に知識をもつだけではなく、知識と知識のつながりや関係を把握することであると、そのためには養成校で「子どもや保育の現状を構造的に把握し、様々な概念で捉えながら問題解決する土台の部分を育てること」と指摘している。また、和田他（2013,p.68）も、養成校での学びについて、保育の実際の場面を想定して「命題知・基礎技能を実際に活用できる知や技法へと変容させていく力や、保育における諸現実の

場面で求められる実践の知や技法を創発していく力が求められる」と述べている。

これらの指摘には同意できるが、見落としてはならない問題は養成校に入学してからこのような学習を開始するのは難しいということである。抽象的な知識を把握し関係づける、知識を問題となる文脈に活用・適応し解決策を導くという知的な営みは、それまでの学校教育のなかで同様の経験を積み重ねていくなかで可能となるものであり、養成校に入学して初めてこのような学習をしてすぐにできるものではないであろう。

養成校では、保育の本質・目的に関する科目として、保育原理、教育原理、児童家庭福祉など抽象的な知識体系を学習する機会がある。これらの知識のなかには学生にとってイメージがわかりやすい身近なテーマもあれば必ずしもそうではないものもある。そのような状況のなかで、抽象的な知識体系を正確に理解することが求められる。そのさい、高校で学ぶ現代文の読解や数学の理解などを通じて抽象的な知識体系の読み取り、理解、習得を繰り返し経験しておくことで養成校での専門的知識の獲得が円滑になるのではないだろうか。養成校進学前に高校で学ぶ内容そのものではなく、学ぶ過程を通じて自分自身に最適な学習力をつけておくことが、保育に関する専門的知識を学ぶうえで欠かせないのである。

学習力は保育士として就労するようになって重要である。保育士を取り巻く社会環境が複雑化、多様化するなかで、保育士も常に学び続けること、学習意欲を持ち続けることが求められる。自分自身に最適な学びの方法やスキルを身につけていることが、新しい知識体系や技術の習得を容易にするのである。

後者の高校までの学びが保育士の専門的知識の前提になるという点については、浅木（2011）は理科の基本的な知識がないまま養成校に進学する学生が保育士として保育を行ったさい、質の高い保育を展開したり、幼児期の子どもたちに科学や生物に対する興味や関心を育んだりすることができるの

かと疑義を向けている。

高等学校で学ぶ内容は養成校で学ぶ専門的な知識の前提・土台となるものである。文部科学省はすべての者が社会で生きていくために必要な力を身につけることを高等学校の目標として掲げている。子どもが科学や生物に関心や興味をもつような保育実践を展開するためには、保育実践の技術だけではなく、高校までに学んだ知識を活用して、どのような素材を用意し配置すればよいかを考えることが欠かせない。すなわち、養成校で学ぶ専門的な知識を十分に理解し、活用するためにも高校までに学ぶ基本的な知識が必要なのである。

また、保護者との関係構築においても基本的な知識が必要となる。保護者（母親）の高学歴化や文部科学省による高校での学びは「すべての者」にとっての必要なものという考えからすれば、保育の専門家として保育の専門的な知識や技術を有することは言うまでもないが、それだけではなく高校までの学習内容を社会人の基本的な知識、教養として有することが保育士には求められる。秋田（2015）は新人保育士にとっては子どもとの関係を構築するより保護者との関係を構築することの難しさを指摘しているが、社会人として必要な基本的な知識が欠けているところに、どれほど保育の専門家であると主張しても信頼関係の構築は難しいのである。

ある保育士（施設長）は、保育士としての風格の重要性を指摘している。それは、保育士という職業を超えた人間として成熟しているかどうかにかかっている、すなわち保育士として保育をする以上、保育に関する専門的な知識や技術を有していることは当然であるが、深く広い教養を有していることが人間としての深みや広がりになり、それが風格として表れると述べている。

高等学校での学びは、保育内容に関係がないのではなく、保育の展開を充実させるために必要な土台であり、保育の専門家として成熟していくために欠かせないものであると言えよう。

## 5 まとめと今後の課題

本稿では、養成校における保育士養成のありかたに関して、養成校での専門的な学びと高校での学びの関係、高校での学びが養成校の学びとどのようにつながるのかに関して2つの小問を検討してきた。

養成校への進学希望者は主要教科ではなく技能教科を重視しており、保育士の職務と主要教科のつながりを意識していないことが明らかとなった。しかし、保育士として現代社会における課題に対応するため、また養成校で抽象的な科目を学習するため、高校までの学習を通じて学習力を育ておくことや社会人の基礎としてそれを理解しておくことが求められる。主要科目を十分に学ばないまま養成校へ進学することは、養成校での専門教育の基盤を揺るがしかねないことを指摘してきた。

養成校のホームページを閲覧すると、在校生がオペレッタや手遊びをしている様子が掲載されている。あるいは、そうした技術を披露できるセンターやホールのような施設・設備の美しさ、豪華さが掲げられている。こうした技術が保育士養成に欠かせないことは言うまでもないが、これまでの養成校は技術的な側面に光を当てすぎてきたのではないだろうか。確かに、入学してから学べばよいという意見もあろうが、抽象的な知識体系の理解の仕方やそうした知識を学ぶ必要性は養成校に入学してすぐに身につくものではなく、高校までの学習を通じて習得しておくことであろう。その学習を通じて学習力を育み、また専門的な学習をするための基礎知識を習得しておくことで、養成校での学びが円滑にかつ効果的になると思われる。

養成校に入学してから使用する『保育者論』のテキスト（2015, pp.66-67）には、「ピアノが弾ける、歌が歌える、制作や運動遊びができるという技術だけではなく、いつ、どのような場面で、どのような意図で遊びを提供するのかということも学ぶのである。つまり、知識だけでも技術だけでも子どもに適切にかかわることは難しい。両方がつながっているということと、それぞれをバランスよく習得するこ

とがとても重要なのである」と記述されている。

保育には知識と技術の両方が必要ということは当然のことであるが、高校生の養成校への進路選択の実態を鑑みると、養成校のメッセージとして入学希望する生徒に対して主要教科と技能教科のバランスのよい学習を積んでおくことや学習力を身につけておくことについてこれまで以上に明確なメッセージを伝えていくことが必要なのである。保育士になるから数学は必要ない、ではなく、保育士になるからこそ数学をしっかり学ぶという姿勢を養成校が求めるということを明示することで、入学後の抽象的な科目の学習に対する学習意欲や姿勢の向上が見られ、結果として保育士の専門性を高める基盤を養成校で構築することが可能になるであろう。保育士の専門性を高める学びは養成校入学前から始まっているということをこれまで以上に明確に発信していくことが、専門職としての保育士を育成する養成校に求められているのである。

今後の課題として、多項ロジスティック回帰分析においてサンプル数に留意することを述べたが、調査対象の高校を増やすことで養成校進学者のサンプル数を増やすことができる。また、本研究の発展として高校での主要教科の必要性を意識していた学生とそうではない学生の養成校での学びの様子や養成校卒業後の様子を分析することで、保育士の専門性の土台をつくる養成校の教育のありかたの示唆を得ることができるであろう。

#### 【引用参考文献】

秋田喜代美 (2015)、『続 保育のみらいー園コンピテンスを高めるー』、ひかりのくに。  
浅木尚実 (2011)、「保育士養成校における学生の理科離れの課題と提言ー科学リテラシーとブックトークー」、『淑徳短期大学研究紀要』、第 50 号、83-96。

公益財団法人児童育成協会監修・矢野誠慈郎・天野珠路編集 (2015)、『保育者論』、中央法規出版株式会社。

厚生労働省 (2017)、『保育所保育指針<平成 29 年告示>』、フレーベル館。

厚生労働省 (2017)、「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ (平成 28 年 12 月 21 日社会保障審議会児童部保育専門委員会)」。

天野郁夫 (2014)、「大学全入化時代と大学の学力問題」、高等教育フォーラム監修・松田良一・正木春彦編集 (2004)、『危機に立つ日本の理数教育』、明石書店。

後藤範子 (2011)、「4 年制大学における保育士養成教育と資質能力向上に関する一考察」、『東京家政学院大学紀要』、第 51 号、23-30。

佐藤達全 (2012)、「短期大学における保育者養成と「保育者論」について」、『育英短期大学研究紀要』、第 29 号、73-86。

佐藤達全 (2015)、「保育者を目指す学生の文章力を高める取り組みについてー保育実習 I と保育実習 II の実習日誌を比較して考えるー」、『育英短期大学研究紀要』、第 32 号、53-72。

吉田明史 (2013)、「保育者に必要な数学力についての基礎的研究(1)」、『奈良文化女子短期大学紀要』、第 44 号、121-136。

吉田明史 (2015)、「保育者に必要な数学力についての基礎的研究(2)」、『奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要』、第 46 号、129-149。

和田明人・君島昌志・青木一則・米山珠里・日野さくら (2013)、「保育者養成におけるアクティブ・ラーニング」、『東北福祉大学研究紀要』、第 37 号、57-71。

(あさい たくや) 埼玉東萌短期大学

(あさい かおり) 東京未来大学